



桜色の風に、
花や野菜たちの文様が愉し気に舞う。
食卓が華やぐ、かわいい器たち

愛知県・常滑
平野美帆さん

春色のやわらかい風にふわあつと包み込まれるような感覚とでもいうのだろうか。平野美帆さんの作品には、独特の世界観がある。「和のピンクを出したかったんです。桜の花のような色を」。その桜色から飛び出すかのように、花が咲き乱れ、木の葉、野菜やフルーツたちが愉し気に描かれている。皿を埋め尽くした文様は、とても軽快。風に舞う葉、森の小道を彩る木の葉や木の実。たとえば、落花生や、もやしが登場する。おとぎ話の中へ誘われているような錯覚になる。それにしても、とてもリズムミカル。

「鉛筆で、落書きをしている感じかいてるんですよ」と平野さん。信楽と美濃の土をブレンドし、白さを出すため、白化粧土を刷毛で10回ほどぬり重ね、乾いて固くなる前に、竹ぐしで何の迷いもなくさらさらとかいていく。「陶箱の蓋は、はみ出して側面にもかくんです。そうすると、空間が広がって見えるでしょう」。

陶芸をはじめたのは、美大で陶芸サー



mibo hirano

1975年愛知県生まれ。99年武蔵野美術大学工芸工業デザイン卒業。02、07年長三賞陶業展入選、08年益子陶芸展入選、高岡クラフトコンペ入選。99年ギャラリー藤島屋(東京)にて二人展「青花」、04年cafe y galeria風華(刈谷)にて初個展「土の塔」。以後、個展やグループ展を毎年開催。

クルに入ってから。「まわりは、みんな

おしゃれな格好をした人ばかりで、でも陶芸サークルは、みんなジーパンにTシャツ姿だったので入りやすかったんです(笑)。その後、陶芸を専攻し、国際文化交流の手伝いで常滑に。「轆轤がもう少しで。特に、急須は、轆轤の遠心力だけですべてのパーツがつくれて、それが一つの道具になるのがすごいって。就職は、産地がいいなと思ったんです。常滑の製陶所で2年、筆での絵付けの仕事をする。その後、自分の作品をつくりながら、高校のセラミック科で、やんちゃな男子生徒たちを相手に轆轤を教えること8年。まったくやる気のない生徒たちを振り向かせるために、急須づくりの達人を呼び、技のすごさを肌で感じさせたそう。生徒たちに本物を見せる。平野さんの心は、とても温かい。いや熱い。

一方、自分の作風に悩んでもいた。グループ展や個展など、人に見てもらう機会が増えると、人との違いを意識しはじめ、自分のできることは何だろうと悩み始め

たんです。

実家にガス窯をつくり、自分の作風にあせり悩みながら、身近にある畑の野菜やおばあちゃんがつくった干し柿などをデッサンした。

「でも、絵付けが上手な人はたくさんいる。私らしさは？」を模索するうち、自分の好きなワイリアム・モリスや版画、切り絵などにヒントを得て、今のスタイルにたどり着く。今も社会勉強にと2年程前にはじめた陶芸体験工房の講師をしている。

「お客さんに教えるために、手びねりや季節を意識した企画を考えていくうちに、自分の中でバリエーションが増えたんです。行く先々で課題をクリアし、吸収、そして脱皮していく。やわらかな作品からは、想像がつかないほど、とてもパワフルで勉強熱心な平野さん。「次は、自分が納得できる黄色を出したいんです」とこやかに語る。どんな黄色になるのだろうか。期待に胸がふくらむ。

十三夜ウェブマガジンより転載

